

# カモ鍋を食べそこなった話

明治コンサルタント(株)  
三塚 罔彦



昨年6月初旬の一夕、帰宅すると妻が「大変大変、これ見て見て」と慌てふためいている。部屋のカーペットに座り込んだ妻の両掌の中で、何やら小鳥らしきものが蠢きながらピーピー鳴いている。鶏の雛よりもやや大ぶりで、顔周りは黄色であるが全体に褐色が強く、くちばしは大きく平らで何よりも足には水掻きがついている。「カモじゃないか、どうしたんだ」

つい今しがた買い物帰りに近所の坂道を上ってくると、途中自動車が数台停車していた。何事だろうと覗き込むと親1羽に子が1羽のカモの親子が道路の向こう側からこちらに横断してくる最中である。ひょっとしたらこれが話に聞くカルガモ親子の行進かまあ可愛いと見惚れていると、不届きなドライバーがいきなりクラクションを鳴らした。

カモ親子の驚くまいことか。親鳥は半ば飛びながら道路を渡り切って続く草藪に飛び込んでいった。子は後を追おうとしたが飛べないうえに体が小さいため歩道との段差が越えられず、何度か挑戦を繰り返した後とうとう歩道のすぐ下ですくんでしまった。

とり合えず車から守ろうと子がモを掬い上げてみると掌の中で震えている。親ガモは姿を消したままで見当たらずどうしたものかと途方にくれていると、一部始終を見ていた近所の農家の親父さんが寄ってきてこれはまさしくカルガモであること、親ガモを捜すのは難しくこのまま放置すればトンビや野良ネコの好餌になると教えてくれたので思い余って家に連れてきた。

さあそれからが大変である。鳥類図鑑を見てもカルガモの飼い方までは載っていないので動物園に電話すると、水草を中心に雑食性であることや水鳥なので当然のことながら日に数回は水浴びが必要とのことである。

ご飯を細かく刻んでこれに金魚のエサをまぶしてやると夢中になって食べる食べる。やがて満腹し掌に包まれると間もなく脛を反転させてウトウトする。そとカーペットの上におくと少しキョロキョロしていたが、すぐに私や妻の

後をピーピー鳴きながらヨチヨチと追いかけて始めた。本では読んだことがあるが動物発達学でいう「刷り込み」を目の当たりにしたのは初めてである。

ここに至って私は宣言した。「飛び立つまでは面倒見るぞ」

鳥類は眠っている時以外は常に採餌か排泄する生活となるため、また水鳥は水に浮遊した状態での餌を好むので部屋の中に放し飼いにするわけにいかず、風呂場に住所を定めて物置にあったハムスターのケージと洗面器とでプール付き豪邸を提供した。餌は市販の金魚や亀の餌に山東菜などを刻んで混ぜ合わせこれに水を加えたものを与えたが、格別体が赤くなったり首が長くなるような事は無い。

起床するとピーを庭に連れ出し散歩させるのが私の日課となった。放してやると芝をついばんだり土をつついたりしながら例の歩き方と鳴き声とともに私の後を追う。アリや小さなクモなどを捕らえて掌にのせて差し出すと喜んで食べる。

早速ピーを写真に撮り、会社で皆に自慢して歩く。

「大きくなったら是非一緒にカモ鍋を囲みましょう」と揉み手をする輩が多かった中に次のような心配なことを言う人もいる。

いわく「鳥類は食べる、寝るなどは本能に拠るが飛ぶことは学習で獲得する。いつかテレビで怪我で仲間置き去りにされた白鳥に両腕に翼様の物を付けた人が一生懸命飛び方を教えているのを見たことがある。従ってお前もピーに飛び方を教えねばならない」後日これは杞憂に過ぎないことが分ったが当初は真剣に考えた。

2週間ほど経って体が一回り以上大きくなり住居が狭くなったことと、陽光をもっと浴びさせるために軒下に中型犬用のケージを据え付け転居して頂いた。と同時に専用プールは洗面器から息子が幼児期に水遊びしたタライとなった。

7月に入り一ヶ月を過ぎた辺りから急に成長が早まり、ケージからの出し入れに両手で抱えるときに日、一日と重くなるのが実感でき、翼(風切り羽)も次第に形を整え始めて体の色も黄色みが取れていった。

この頃から私たちの後を追う行動は少なくなりひとりで遊びたがるようになる。庭に放してやるとさして広くも無い庭を一通り散歩し、水を張ったタライの所にくるとコンクリートブロックを踏み台にしてドボンと飛び込む。全速で泳いだり潜ったりひとしきり狂騒の時を過ごし、やがて落ち着くと甘えた声をだして催促する。…私にはそうとしか聞こえない。用意した餌を水中に入れると少し興奮状態になって朝食を召し上がる。夏の早朝のひと時私はうっとりとしてそれを眺める。

7月下旬になると一段と体は大きくなり羽ばたきをするようになった。翼が未完成のため未だ飛ぶことはできないが羽ばたきを利用して走りまわることを覚えた。独立心は益々強くなり散歩を終えてケージに入れるため捕まえようとするのが嫌がって逃げ回り、私ひとりでは手に負えず妻と二手に分かれて追い詰めやっと捕まえる毎日となった。しかしケージの中では相変わらず愛想がよく、掌から餌を食べ顔を寄せるとなめるようにつついてく



れる。

この頃から私たち夫婦の間ではピーをどこに放すかが具体的な問題となった。近所の沼にも時折カルガモの姿が見られるが、人家が近いために野良イヌや野良ネコが多いので不安だなあと考えあぐね、動物園のアドバイスを受けてラムサール条約に登録されている県北の伊豆沼(仙台の北方約50 km)が良いだろうということになった。

8月5日、ちょうど我が家にピーが来てから二ヶ月である。朝、庭でしきりに羽ばたきしているのを見て思いつき高さ1.5mくらいの台の上に載せてみたらモジモジしている。やがて意を決したように宙に飛出した。バタバタと飛ぶというか落ちるというか何とも不様な飛型で、それでも3mほど向こうに着地して私の顔を見上げている。この日から特訓が始まった。台から庭の端まで10m足らずの狭い我が家の庭であるがなかなかそこまで届かない。

8月13日、妻と伊豆沼へ下見に出かける。小船を出してくれた船頭さんの話ではここはハクチョウ、ガン、カモなど渡り鳥の天国であり、留鳥のカルガモも結構生息しているそうだがその日は姿を見ることができなかった。

8月14日、前日に息子が久しぶりに帰省したのでピーの送別会をやろうと庭に炉を設えて盛大に焼肉パーティーを行い、3人と一羽の記念写真を撮った。

次の日の夕方、庭にいた妻が「飛んだ、飛んでった」と大声をあげたので急いで外に飛び出した。2m程の高さの垣根を越えて家の前の道路沿いに飛んでいき、隣の家の向こう端くらいまでは見えたがその後は見失ったという。住宅街で車の往来は少ないが万が一のこともあるので走って探しに出た。

